シリーズ／21世紀に遺すもの

住まいは文化

先人たちが遺してくれた住まいづくりの知恵

第24回 新潟県魚沼市 重要文化財 目黒邸

豪雪地帯特有の屋敷の特徴と耐震性に考慮した建築

豪雪地帯で知られる新潟県魚沼市に建つ目黒邸は、1797（寛政9）年に十一代当主五郎助が建てた割元庄屋（大庄屋職）の役宅を兼ねた豪農住宅です。旧会津街道に沿って塀を築き、寄棟造に玄関部の入母屋造を組み入れた主屋には二重梁が用いられています。3mを超える豪雪や新潟地震、中越地震にも耐え、現在に至っています。1974（昭和49）年には国の重要文化財に指定されています。

茶の間。あかり取りのための梁の上の障子は壁をくり抜き、後から据えられたもの。

千鳥破風の茅葺き屋根が堂々とした威厳を添える豪農住宅

旧会津街道沿いの広大な敷地に建つ目黒邸。緩い傾斜を持つ水田地帯の上方に位置する立地は、水の管理が村の役人の大きな役目であったことをうかがわせます。

主屋は茅葺き、寄棟造。桁行16間、梁間6間の堂々たる規模（建て面積578.65㎡）です。正面には玄関にあたる表中門（※1）が組み入れられ、千鳥破風（※2）の屋根を持つ入母屋造の姿が威厳を添えています。中に入ると、左手に土間があり、炉地と呼ばれる板間があります。炉地のいろりの上には火の粉が舞うのを防ぐ大火棚が吊るされています。他に馬屋、奉公人の部屋などがあります。土間の右手には、茶の間、番頭が帳付けをした広間、さらに槍の間、奥の座敷など、庄屋宅ならではの役職と住まいに関わる空間が続いています。北側奥の離れ座敷『椽亭（ちょてい）』は、茶室、書院を備え、各地の銘木を用いたしつらいが、当時の豪農の豊かな生活を伝えています。

大火棚の上は土壁で塗り固められており、上に藁ぐつなどを上げて乾燥させた。

正面外観。主屋は約12m。
正面の屋根の庇は雪対策のため約1mもの厚さがある。

豪雪の重量を支えるための工夫
高い柱や二重梁が組まれた屋根裏

目黒邸の主屋は礎石の上に直接柱を据える伝統的な民家の特徴を持ち、深い傾斜の茅葺き屋根と太い柱と梁などで積雪に耐える工夫がされています。柱は6～8寸角の杉などをほぼ均等に配置することで、雪の重みをバランスよく柱に伝えるよう仕組まれています。柱の選定も、天井の高い土間側ではより太くするなど荷重に対して細かな配慮が見えます。

屋根裏の構造は梁の上に2本の太い丸太を山形に組む叉首組（さすぐみ）と梁に束を組み重ねる二重梁になっています。小屋組、太い上屋柱、梁、指鴨居、敷居が茅葺きの大屋根を支え、雪の重みから建物を守っています。

茅葺き屋根は、雪の影響で茅が抜けるため、春の彼岸過ぎに行う「差し起こし」（※3）で屋根の寿命を保っています。

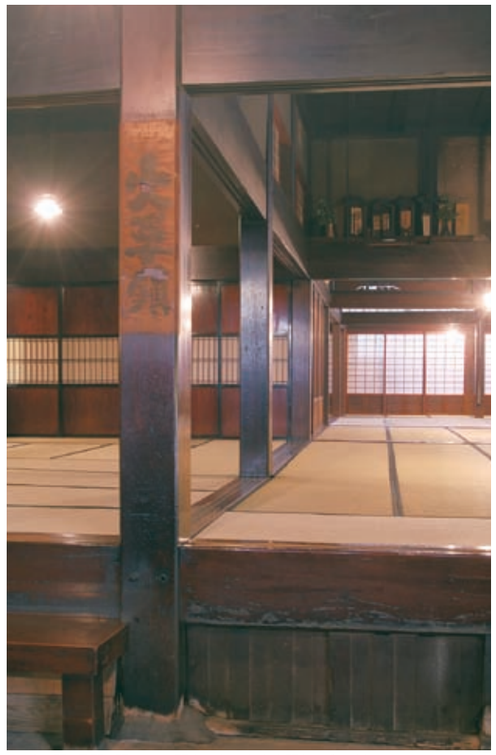
建物の耐久性を高めるため、通風と湿気対策は特に重要視され、茶の間の天井板の隅が動くようになっており、いろりの煙を屋根裏に逃がして換気を行っています。また、床下に空間を設け、湿気を防ぐ工夫をしています。

200年以上も変わらぬ姿で建つ目黒邸は、豪雪に耐え、厳しい魚沼の冬を乗り越えてきた先人たちの知恵の結晶です。

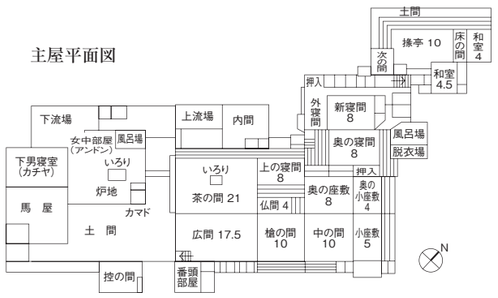
※1 **表中門**／主屋の正面にせり出す形の突出部分で雪除け庇を持ち、豪雪地帯に多い。
※2 **千鳥破風**／屋根の妻部分に装飾や換気・採光のために設ける三角形の造形。
※3 **差し起こし**／古い茅を抜き、新しい茅を差すこと。

屋根はできるだけ雪が積もらないように45度近い傾斜にしている。

炉地（土間）には、大屋根を支えるため梁に束を組み重ねる二重梁が用いられている。



桁行16間、梁間6間の大空間を支える柱は柱間と荷重により、4寸～8寸角（約12～24cm）の柱が配されている。
（手前が8寸角、奥の座敷側が6～7寸角）

主屋で一番太い炉地の8寸角（約24cm）の太柱。小屋組と太い上屋柱、梁などと組まれ、屋根裏の大架構を支えている。

主屋平面図